KOSAIDO SHUPPAN

月に濡れる女

山手樹一郎

color

カラーさしえ

時代小説　月に濡れる女

カラー小説新書

昭和45年2月5日　初版発行　　¥ 360

著　　者　山手樹一郎（やまてきいちろう）

発行者　桜井文雄

発行所　広済堂出版
東京都新宿区下宮比町15
番5号モリサワビル3F
電　話 03－267－2361番
振　替 東京 141142番

写真植字製版
印　　刷　桜井広済堂

© 1970　山手樹一郎

月に濡れる女

山手樹一郎

小説新書

広済堂出版

目　次

梅の宿	5
夜の花道	31
辻斬り未遂	63
月に濡れる女	95
めおと雪	119
おぼろ月	149
笊医者	183
牝　犬	209
後家の春	233
夜馬車	269
伜	301
香代女おぼえ書	333

さしえ・東　啓三郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

梅の宿

厄病神

吉田屋のお蝶は、その日岩鼻からの帰りに、新田でいやな喧嘩を見てしまった。

岩鼻の新蔵という博徒で目明しで、いわゆる二足の草鞋をはいている一家の身内二人が、手代風の旅の若い男を踏んだり蹴ったりしているのである。旅の男は道ばたへころがって、頭を両腕の中へかかえこみ、海老のように体を折り曲げたままじっと動かない。

――男のくせに、なんて意気地がないんだろう。

勝ち気だから、お蝶はそんな旅の男の卑屈さに同情は持てなかったが、ほうっておけば蹴殺してしまうかも知れない二人の剣幕なので、女だてらに思わず人垣を掻きわけていた。

黒襟のかかった黄八丈に、博多の帯、燃えるような緋鹿の子の緒をかけて結綿に結ったお蝶は、大柄で色が白く、倉賀野小町といわれている旅籠屋の娘だから、ぱっと人目につく。

「そうら、吉田屋のお蝶さんがきたよ」

弥次馬の中からそんな声が聞えて、よせばよかったかしらと、ちらっと後悔はしたが、もうあとへひけなかった。
「岩鼻の代貸さんも、猪之さんも、ちょいと待ってくださいな」
「なんだお蝶さんか。こんな奴、とめちゃいけねえ」
二人とも顔見知りで、代貸はもう四十がらみの勝五郎という男、若いほうは猪之吉というその弟分だった。
「だって、相手はもう動けなくなっているんですもの、どんなことをした人か知らないけれど、勘弁してあげてくださいな」
「なあに、この厄病神野郎ははじめっから動かねえんだ」
猪之は小馬鹿にしたように、どすんともう一つ足蹴にしながら、苦笑する。
「あら、はじめっからここに寝ていたんですか」
「まさか、寝ている奴と喧嘩をする物好きでもねえが、おれの顔を見るなり、あんまり憎いことをいうんでね」
勝五郎はさすがに年だけに、おとなげなさそうな顔をする。
「どんなことをいったんです」
「この野郎、すれちがいながら、兄貴の顔を見て、気の毒だなあっていうんだ。なにが気の毒なんだ

って聞くと、よいよいになる相が出ているってぬかすじゃねえか。縁起でもねえ、人にはいうことと、いわねえことがあらあ。とんでもねえ厄病神よ」

代貸は達磨のように小肥りな男には違いない。が、人の顔を見て、いきなりそんな失礼なことをいえば、誰だって腹が立つだろう。お蝶も呆れて、言葉に困ったが、

「すみません。それなら余計な口をきくんじゃなかったんですけれど、じつはあたし今日、お父つぁんの願がけにおまいりしての帰りなんです。これもなにかの仏縁でしょうから、もし堪忍して、あたしに任かせていただければ、本当にうれしいと思います」

と、正直にたのんでみた。

「そういえば、お父つぁんのあんばいはどうだな」

代貸はそっちへ気をひかれたらしい。

「思わしくないんです。なにぶん病気が病気だもんですから」

「そいつはいけねえな、うちの親分も心配していたが、なあに、年からいえばまだ働き盛りなんだ。一に看病、二に薬ってこともあらあね。まだ諦めるにゃ早いやな」

「そのつもりであたし、願がけまでしているんですけれど」

「それがいい。お蝶さんは親孝行だからな。よし、そのお前の親孝行の志に免じて、この野郎は勘弁してやろう」

「ありがとうございます。恩にきます」
「まあ、お父つぁんを大切にしなせえ。――猪之、もういいや、出かけよう」
「行くのか、兄貴。こん畜生、お蝶さんのおかげで命びろいをしやがった。ありがたく思いやがれ」
行きがけの駄賃に、もう一つ足蹴にはしたが、案外二人はあっさりと納得して、引きあげて行った。一つには、これ以上いためつけても、厄病神から一文も出ないと、見切りをつけていたからでもあるのだろう。
「お前さん、もう起きたらどうなんです。立てないんですか」
お蝶は泥だらけになって、まだころがったままじっと頭を抱えこんでいる厄病神の顔をのぞきこむようにして、声をかけてみた。人をつかまえて、いきなりよいよいになる相があるなどと、そんな非常識なことをいう男にはあんまり好感は持てない。
「ありがとう。やれ、助かったかな」
男はむくりと起きかえって、あたりを見まわした。二十四五でもあろうか、案外邪気のない童顔で、そんな憎まれ口をきく人柄には見えない。
「どうしてあなた、あんな悪い相手に詰まらない憎まれ口などきいたんでしょうね」
「憎まれ口じゃないんだ。ひょいとあの男の顔を見て、おれは人助けだと思ったから、教えてやったんだけどねえ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「じゃ、本当にあの人はよいよいになる相があるんですか」
「うむ、早ければ二三日、おそくても二三カ月のうちだな」
満更でたらめをいっているようにも思えない顔つきである。
「あなたは人相観なの」
「人相観ってわけじゃないが、少しぐらいは当たることもあるからふしぎだ」
「そんならそれで、早くあの人にそういってあげれば、こんなひどい目に逢わずにすんだでしょうにねえ」
「いや、よく説明してやろうと思っているうちに、いきなりぽかぽかと殴られたんで、おれは腹が空いているもんだから、相手になるのも大儀だし、頭だけ抱えて、体を殴らせることにしたのさ」
にっこりわらいながら、着物についた泥を払おうともせず、のんびりとまだ道端へ足を投げ出しているのだから、よっぽど腹もすいているのだろうが、生来一風変った性分でもあるのだろう。
野の梅がぽつぽつ咲き出す季節で、今日は珍しく風もないし、おだやかな午下がりで、どこかで農家の牛が眠そうに鳴いている。

梅日和

「お立ちなさいましな。そこまで御一緒にまいりましょう」
お蝶はちょいと考えてから誘った。
父親の惣五郎が昨年の秋あたりから、ぶらぶら床につき出して、医者の見立てでは労咳らしいという。親一人娘一人だし、まだそんなに老いくちる年ではないので、人がいいとすすめるものは、なんでもやってみた。一向にききめは見えず、だんだん衰弱して行くばかりだ。
気性の勝った人だから、父は愚痴一つこぼさないが、このごろではちゃんと死期を覚悟しているようである。この上は神仏にすがってみるほかはない、そう思い立ったから、お蝶は新町の薬師さまへ二十一日の間魚断ちをして願をかけ、今日がちょうど満願の当日だった。帰りに岩鼻の藤田硯庵先生をたずねて、これこれだから父の容態を正直に話してくれとたのむと、
「今日明日ということはないが、労咳という病は不治だからな、覚悟はしていなくちゃいかんな」
と、はっきりいわれてしまった。
重い胸で帰る途中、この男に出逢ったのである。
なにかの仏縁じゃないのかしら。善根をつんで、一日でもお父つぁんの命がのばせるものなら、この男を家へつれて帰って一晩とめてやってもいい、路銀がないなら、それを施してやってもいい、お蝶はそんな気持になったのだった。
「よろしかったら、お中食もさしあげますわ」

「あんたの家は農家ではなさそうだね」
男はまだ足を投げ出したまま聞く。
「ええ、倉賀野の吉田屋惣五郎という旅籠屋ですの」
「宿屋かあ。それはありがたいな。お礼に薪を割ってあげよう」
「それには及びませんわ、宿屋ですもの、お中食ぐらいお安いものです」
「いや、宿屋さんだからただで昼食を喰わしてもらっちゃ悪い。薪を割らせてくれるんなら行ってもいいな」
「ふ、ふ、なんだか恩にきせられているみたい、さあ、お立ちになりません」
「そうだな。そう話がきまったら立とうかな」
男はどっこいしょと立ち上って、前の泥を払った。お蝶は背中のほうを払ってやりながら、
「ずいぶんひどく蹴られたんでしょ。どこか痛かありませんか」
と、ひどい泥の跡だから思わず眉をひそめずにはいられない。
「なあに、ああいう気ちがい犬というものはね、こっちが手を出すと死にものぐるいになるが、じっとしていると案外自分のほうで手かげん、じゃない、足かげんをしているからおかしなものさ」
あんな目に逢わされて、男なら口惜しいと思いそうなものだのに、この男は少しも気にしていない。負け惜しみなのか、それともそんな風にのん気にできている男なのか、勝ち気なお蝶はなんだか歯が

ゆい。
「少しも口惜しいとは思いませんか」
「あれは博奕打ちのようだね」
「岩鼻の新蔵という親分で目明しの乾分なんです。あなたがよいよいになるといったほうが代貸の勝五郎、若いほうが、弟分の猪之吉、みんな弱きを挫いて強きにごまをする立派な方たちばかりですわ」
新蔵は不治の父親にごまをすって、父親の死ぬのを待っていると、ちゃんと見ぬいているお蝶だ。お父つぁんが死んだって、誰が博奕打ちの妾になんかされるもんかと、腹の中でせせらわらっているしっかり者でもある。
「うまいことをいうな、お蝶さんは」
「あら、あたしの名前、知っているんですか」
「さっき、立派な乾分たちがいっているのを聞いていました」
「あなたはなんとおっしゃるの」
「清三郎、——江戸の薬屋の伜です」
「どちらまで旅をなさるの」
「足にまかせて」
「まあ、結構なお身分——」

「結構すぎますな。道楽息子の手本みたいなものだ」
しかし、自嘲しているような色は少しもない。道楽をして、勘当されたのを男の見得のように自慢したがる。そういういやらしいたぐいの男なのかしら。
「労咳には薬はないものでしょうか」
お蝶は話題を変えた。
「そういえばお父つぁんが病気だとかいっていたね」
「お医者は労咳だというのです」
「労咳は薬より養生でしょうな」
その養生なら、つくせるだけのことはつくしている、こんな道楽息子なんかに聞いてもしようがなかったのに、と後悔した。
「あなたお父つぁんの顔を見ても、死相が出ているなんていわないでくださいね」
「そんな失礼なことはいいません」
「でも、さっきは通りすがりの人にさえ、よいよいの相があるなんていったから、ひどい目に逢ったんでしょう」
「あれはね、出ないうちに少し気をつければ押えることができる病だ。だから、教えてやろうと思ったんだが、不治とわかっている人に、いくらなんでも——」

「もうそのお話、よしましょう」
「お蝶さんは美人だねえ」
清三郎は気をきかしたつもりか、取ってつけたようなことをいいだす、
「清三郎さんも美男子だわ」
「おかげでね、金と力はないほうだ」
「だから、お腹を空かしたり、さっきは蹴飛ばされたり――」
「ああそうか。おれのは本当に金と力がなかったんだねえ」
「そんなんで薪が割れるかしら」
「お蝶さんは頭もいいんだなあ」
「ついでに、よいよいになる相はどうなんでしょう」
「それはない。たしかに大丈夫だ。ただし年を取るとお婆さんになる相はあるようだね」
馬鹿らしくて、たあいがなくて、こういうのが案外色街の女などに可愛がられるのではないかしら。ふっとお蝶はそんなことを考えながら、なんだか軽蔑したいような、それでいて妙に親しみやすいような、まったく変な厄病神を拾ってしまったものだと思う。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com